



下痢を起こしやすい薬剤について

Clostridium difficile 腸炎が話題になりましたが、下痢には様々な原因があります。ひとつに薬剤があります。可能であれば、原因薬剤を中止し、症状に見合った治療を行うことが大切です。

今回、下痢を起こしやすい薬剤をまとめてみました（表参照）。

また、表には示していませんが、慢性水様性下痢の原因として、顕微鏡的大腸炎があります。内視鏡検査では肉眼的に大腸粘膜の異常は見られませんが、病理組織学的には大腸粘膜下に特徴的なコラーゲンバンドの肥厚を認めます。発症の原因は、いまだ不明ですが、薬剤の関与が報告されており、非ステロイド性抗炎症薬（NSAIDs）、プロトンポンプ阻害薬、H2 受容体拮抗薬などが挙げられています。タケプロンでは、薬剤開始 1-2 ヶ月後に発現するとの報告があります。ご参考になれば幸いです。

下痢を起こしやすい主な薬剤		
分類	薬剤（当院採用薬一例）	メカニズム
抗生物質	・リンコマイシン系（ダラシン注） ・経口合成ペニシリン系 （ビクシリン注・スルバシリン注、サワシリン細粒・カプセル・オーグメンチン錠） ・第三世代セファロスポリン系 （セフォタックス注、スルペラゾン注、セフトリアキソン注、モダシン注、フルマリン注、フロモックス細粒・錠、メイアクト細粒・錠）	正常な腸内細菌のバランスが崩れ、ある種の菌（Clostridium difficile など）が異常に増え、その産生毒素により腸管粘膜を傷害されることによる。抗生物質開始後、5-10 日後に始まることが多い。
抗がん剤	・代謝拮抗剤 （5-FU 注、メソトレキセート注・錠、キロサイド注） ・植物アルカロイド （カンプト注、エトポシド注）	消化管粘膜が傷害されるために起こる。特に、カンプトは grade3 以上の下痢が 20% に出現する。数日~2 週間後に発症する。
抗炎症剤、解熱鎮痛薬	・NSAIDs （ロピオン注、ロキソニン細粒・錠、ボルタレン錠・カプセル、ポンタールシロップ、セレコックス錠）	消化管粘膜の細胞保護作用を破綻させて障害を起こす。
消化管機能調整薬	プリンペラン錠、ナウゼリン錠	腸管の運動を亢進し、下痢を起こす。
プロスタグランジン製剤	サイトテック錠、プロスタグランジン E2 錠、プロスタルモン F 注	腸管の運動を亢進し、下痢を起こす。プロスタグランジン E2 は腸液の分泌を亢進させ水様性下痢を起こす。

<参考文献>

- ・横山賢二；気になる治療薬の効果的な使い方と副作用 便秘・下痢の分類と薬の適応, COMMUNITY CARE, 6(13),24-29,2004
- ・重篤副作用疾患別対応マニュアル 偽膜性大腸炎（平成 20 年 3 月） 厚生労働省
- ・がん診療レジデントマニュアル 第 4 版 国立がんセンター内科レジデント編